

# 4つの高齢者居住施設における食堂での入居者及びスタッフの 行為と介護の違いに関する事例研究

石井研究室 佐藤万里子

キーワード：特別養護老人ホーム，ユニットケア，  
グループホーム，ケアハウス，食事場面

## 1 研究の背景と目的

現在、様々な種別・形態の高齢者居住施設が存在している。入居者の身体的な状況の違い、介護度の違いはあるが、施設間でみられる生活の形やその質の相違は大きいものがある。

本研究では、4つの異なる高齢者居住施設を対象に、入居者の生活の中で大きな意味を持つ行為として「食事」をとりあげ、そのあり方やその環境から4つの施設を比較することで、高齢者居住施設のあり方を考える基礎的な資料を得ることを目的としている。

## 2 調査方法

4つの調査対象施設において、入居者及びスタッフの食事にかかわる行為場面について連続的に観察し、10分毎に（特徴的な場面についてはその都度）その場面を詳細に記録をとった。食事行為の内容、他入居者やスタッフとの関わり等を人物を特定せずに平面図上に記入することで、施設環境や、入居者、スタッフへの影響を分析・考察した。

## 3 調査対象施設の概要と食事の形

4つの施設を調査対象として選定した（表1）。特別養護老人ホームの「従来型」では大食堂で食事をする。食事は厨房で作られ、配膳車によって運ばれてくる。食事の時間前になるとスタッフの誘導により、または自ら食堂に集まる。その後食堂内では、食事の介助を受ける人、介助を待っている人、食堂に連れて来られている人が食堂内に混在し、食堂内はあわただしい雰囲気となる。スタッフの都合により入居者が食事の時間を過ごしている。

特別養護老人ホームの「ユニットケア」は10名の生活拠点であるユニットの食堂で食事をする。ユニット

の台所で食事は作られる。自ら、または声がけによって食堂に集まり、テレビ等を見ながら食事を待つ。スタッフから台拭きや配膳を頼まれ手伝う人もいる。

グループホームもユニットケアと同様に調理からホームの台所で行われる。食事時に自ら食堂へ来てスタッフの手伝いをしたり、テレビ等を見ながら食事が始まる。食事中は会話が絶えない。下膳はほとんどの入居者が自分で行き、スタッフに頼まれて洗い物を手伝う人もいる。食事中だけではなく、食事前後の行為をとおしてスタッフとの関わりがある。

ケアハウスでは、食事時間になると各自で食堂に集まり、食事配膳等を自ら行う。食事を終えると居室等へ戻る。一部入居者は自室で食事をする。配膳時には入居者同士で挨拶が交わされ、賑やかである。

## 4 食事場面の展開と入居者とスタッフの関わり方

特養では、介護行為といった業務的な関わりがほとんどを占め、スタッフと全く関わりを持たない入居者も存在している（図2・場面1）。また、食事中の人がいる最中でも、入れ歯をとり洗面所に行く等、業務優先の生活場面が展開している。

ユニットケアでは台所で調理をしているスタッフの様子を見ている入居者がいる。スタッフ数が少ないため入居者との直接的な関わりは多くないが、スタッフの様子を真近で感じることができる。スタッフも一緒に食事を取るため、食事時にゆっくりとスタッフと関わりを持つことが出来る（図2・場面2・3）。

グループホームではスタッフ数も多く、スタッフが食事を作りながらも、こまめに入居者とコミュニケーションをとる場面がみられた。入居者も積極的に食事

表1 調査対象施設概要

	特別養護老人ホーム 従来型	特別養護老人ホーム ユニットケア型	グループホーム	ケアハウス
所在地	石川県江沼郡	石川県江沼郡	富城県川崎町	富城県仙台市
開設	平成6年10月	平成16年4月	平成16年4月	平成12年4月
定員	50名	30名(10名×3)	18名(9名×2)	30名
空間構成	制限あり	家具持込可	家具持込可	家具持込可
居室構成	4人部屋 2人部屋	全室個室	全室個室	全室個室
食堂形態	食堂	台所付き食堂	台所付き食堂	台所付き食堂
食事提供	調理室 (配膳車で運ばれてくる)	食堂内台所	食堂内台所	調理室 (配膳車で運ばれてくる)
食事を作る人	スタッフ	スタッフ一部入居者	スタッフ一部入居者	スタッフ
食堂面積	198㎡	60.4㎡	43.7㎡	128㎡
調査実施日	2004年10月9日	2004年10月8日	2004年9月13日	2004年9月21日
調査時間	朝 7:00~9:00	朝 7:00~8:50	朝 7:00~8:50	朝 7:00~8:50
(食事の準備~最後の1人が食べ終えるまで)	昼 11:40~13:20	昼 11:30~13:00	昼 10:20~2:00	昼 11:30~13:00
	夜 17:50~19:50	夜 17:10~18:30	夜 15:50~18:40	夜 17:00~18:30
対象者数	30名	8名	9名	30名
平均要介護度	4.1	2.4	3.0	なし
最大スタッフ数	9名	3名	5名	4名



図1 施設別にみた食事時間の流れ(上から昼・夜)

作りを手伝う(図2・場面4)。

ケアハウスではスタッフとの関わりは声がけ程度の最低限のもので、入居者の主体性が尊重されている。

### 5 食事場面からみた食事空間の質

(図2)より、特養の食堂は広いホール空間で、30人以上が一同に集まる。食堂の隅にはベッドが置かれている。グループホームは特養の食堂の約半分の広さで、自立度が低くても壁や家具をつたって歩けるような広さである。また、台所がすぐ目に入りスタッフの食事作りの様子が見えるため食器片付けや手伝い、コミュニケーションがとりやすい。ユニットケアも同様な空間となっている。ケアハウスはテーブル配置が整然とし、特養のような雑然さはない。利用人数は同じ

だが、空間利用の仕方が違うため雰囲気が異なる(場面1・6)。台所はあるが調理は厨房で行われるため使われず、主体的行為によるお茶くみや台拭きに利用されている。食堂は食べるため空間として機能している。

### 6 まとめ

4つの高齢者居住施設の食事場面とそこでみられる行為には大きな差異が見られた。空間としての相違、食事方式の相違、介護の相違、入居者属性の相違といった様々な要因からくるものであり、結果として食事そのもののあり方を大きく変える結果となっている。これらの相違はそれぞれの施設が持っている性質を端的に示したものであり、食事のあり方を考えることで、施設空間のあり方や介護のあり方を考える手がかりになるのではないかと考える。

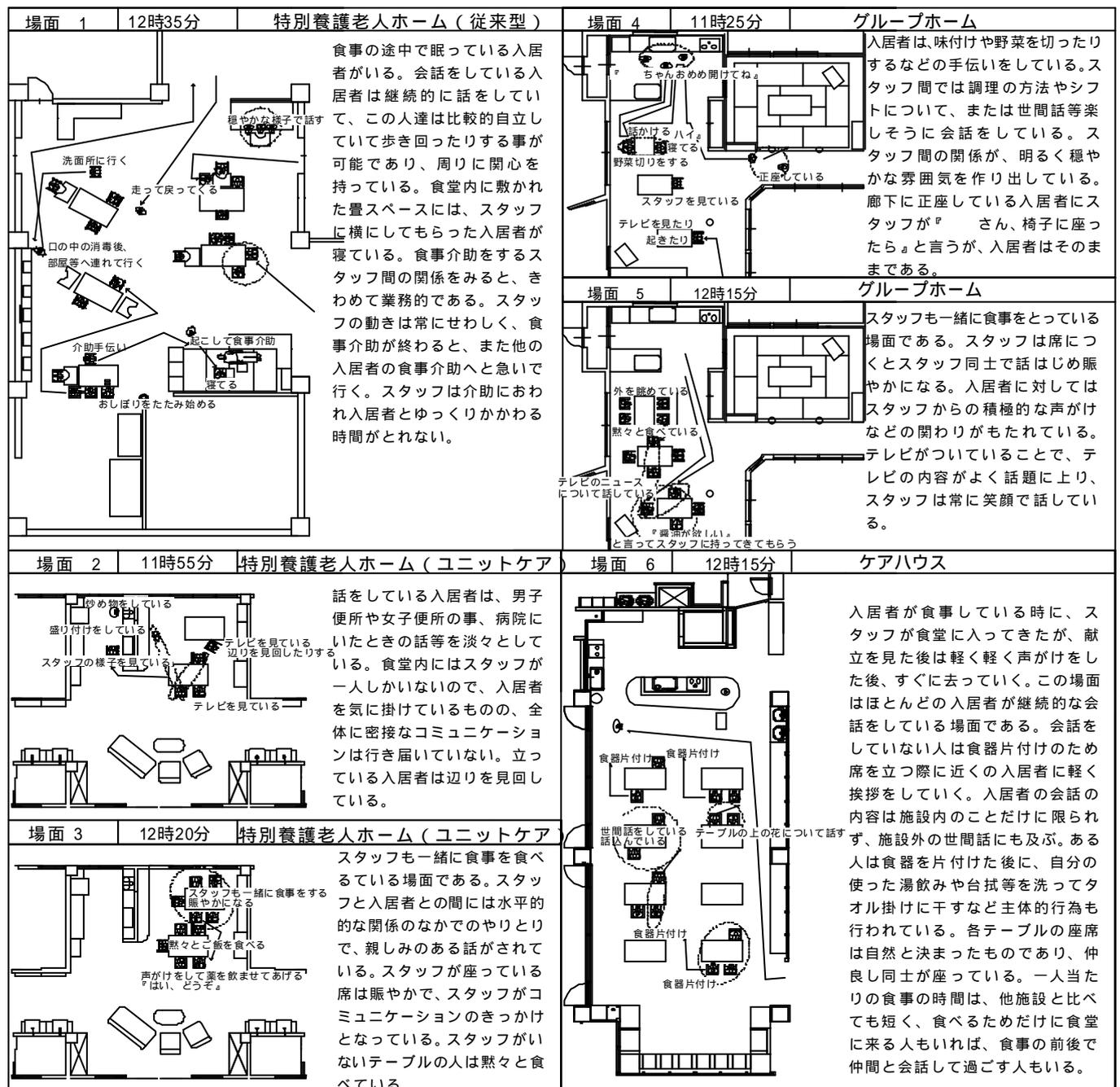


図2 4施設の食事場面事例

